

民族文化のルーツの 2 例の考察

日本海地域の民族音階のルーツは多様である

鈴木雄哉 ・ 中山妙子
Hokonoki Katsuya Nakayama Taeko

1. 台湾民族

① 先史時代（1624 年以前）

文字として記録が残る以前から台湾に移住していた人々を先住民と呼ぶ。その中で、比較的早い時期から外来の影響を受けた民族を「平埔族」、日本戸統治時代までの外来の影響を受けなかった高山部や東部の民族を「高山族」、あるいは「高砂族」という。

先住民は平埔族、高砂族のなかで、それぞれいくつかの少数民族に分類でき、それぞれの言語、風俗、習慣、家屋など異なる文化がある。近年の研究によって、平埔族と高砂族の言語は、すべて南洋の島の語族であるオーストロネシア語族に属していることが判明している。この語族は、東南アジア、オセアニアのいくつかの島と同じ語族に属す。かつてマレーポリネシア語族と呼ばれていたが、台湾の先住民との類似性がみられたことで語族の概念が拡大し、オーストロネシア語族と呼ばれるようになった。

② オランダ植民統治時代（1624 年～1662 年）

先住民に大きな外来の影響を与えた最初の外来の力は、17 世紀のヨーロッパによるものであった。ヨーロッパから最初に記録されたのは、マカオを東方の貿易拠点としていたポルトガル人である。彼らは、縁があふれる台湾を「麗しの島」と呼んだ。実際に上陸したのは、ポルトガルとマカオを奪い合って敗れたオランダで、1624 年に中国の協力を得て、澎湖諸島に築造された砦を撤去し、それを台湾の安平へと移した。一方、フィリピンのセブ島に拠点を置いていたスペインは、1626 年に台北に入り、基隆と淡水を拠点とし、砦と居住地区を設けた。

1624 年、オランダはスペイン人移住地区に侵攻した。その結果、スペインは去り、オランダはスペインの建てた砦を基に砦を築きあげた。オランダはまた、台南にゼーランジャ城、砲台、ゼーランジャ市街、プロビンシア城、プロビンシア市街などを、1624 年から 1662 年にかけて築いた。それは台湾で最初の都市計画と大規模建物の建設であった。当時のオランダ人が制作した「番社戸籍表」によると、彼らの管轄する先住民は 6 万人を超えていた。これは、当時の先住民の 4～5 割を占めていたと推測される。この時期にオランダ人がもたらしたものにローマ字がある。このときの文字を「新港文字」

という。新港文字は、オランダ人が台湾を去って以降も、少なくとも 150 年間は使い続けられた。オランダ人がもたらしたもう一つ重要なものに、漢人の移民がある。オランダ人は、稲と砂糖の栽培を行うために中が高から台湾への漢人の移住を奨励した。それにより、漢人の人口は最も多い時で 3~5 万人に上った。その他にオランダ人は、モノと土地を交換して台湾の土地を自国の会社の財産とすることにより、台湾に土地所有制度ももたらした。

③ 鄭氏政権時代 (1662 年~1683 年)

1644 年、オランダが台湾を拠点とする際、中国は明王朝から清王朝への交代に直面していた。言い伝えによると、鄭氏一族はオランダ人が台湾に来る道案内をしており、明の復興を望んだ鄭成功は、清に対抗する道を選び、清との戦いに備えて一族が熟知する台湾に拠点を置くことを思いついたと言う。

1662 年、鄭成功は、台湾に住む漢人の助けも得て、オランダに勝利する。鄭氏に敗戦することは、オランダにとって想定外の出来事だったようである。

鄭氏一族は、清朝との戦いで和夫王の軍隊を台湾に連れてくると共に、多くの移住者を募集した。その結果、それ以降の 20 年間で、台湾の漢人の人口は約 10 数万人まで増え続けた。当時の先住民は約 12 万人なので、その人数を超えるほどの勢力になったことが知られる。このときに台湾に移住した漢人は、主に現在の福建と広東の両省から来た人々であった。

鄭氏一族は、オランダの貿易産業を継承すると同時に、中国の法令制度や建築技術に習い台湾でレンガを作り、それを使って学校、文武廟、寺廟を建てた。また、オランダ人の残した街区を町として再生し、東インド会社の財産を国有財産に変更した。その他、軍隊は屯田兵として新しい土地を開拓し、移住した人々の私有財産となるよう勧めた。これが、漢人の文化が台湾に根を下ろした始まりと言われている。

④ 清朝統治時代 (1683 年~1895 年)

1683 年、鄭氏は清朝に攻め落とされた。台湾が清朝の支配下に加えられたあと鄭氏一族とともに移住した人々は、強制的に中国大陸へと退去させられた。その結果、台湾は一時的に人口を減らすことになった。清朝が台湾を統治した 1683 年~1895 年の約 200 年間は、民間で危険を冒して台湾に移住した人々の開発を政府が後追いで認めるといった状態であった。たとえば、清政府は、台湾へ渡る際に福建の厦門より台南へのみを許し、そして許可無く家族を連れていくことを放れで禁じているが、密航者が増え続けたため、1732 年に家族の同伴が許可されている。

移住者は、17 世紀末には 15~20 万人であったが、18 世紀末には 130 万人となり、19 世紀末には 250 万人となった。その結果、台湾で人口の一番多い民族が漢人となり、先住民は非常に弱い立場へと変わった。

移住した人々は、政府が設立した「土牛界」と呼ばれる移民と先住民との境界を越えて山中にも侵入し、西から東へと平埔族も、生活のために漢人と結婚するなどしだいに漢化した。移住した人々は、自分の故郷と、自然環境や条件の近い地区を選び開拓していった。たとえば、泉州の人々は海の近くで商業を営んだ。漳州の人々は、内陸で農業に従事した。客家の人々は、山に沿って居を構えた。これは、彼らが少し遅れて台湾に移住したためでもあった。

⑤ 日本統治時代（1895 年～1945 年）

台湾の併合にあたり、台湾人には土地を売却して出国するか、台湾に留まり帝国臣民になるかを選択させた。1895 年に台湾が大日本帝国に編入された時、併合に反対する台湾住民は、「匪徒刑罰法」によって処刑された。その数は 3000 人に達した。抗日運動は、1915 年の西来庵事件（タパニ事件）で頂点に達した。社会面では当初は植民地としての地位にあった台湾であるが、日本国内で大正デモクラシーが勃興する時期に台湾でも地方自治要求が提出され、台湾人としての権利の主張が行われている。これらは台湾議会開設請願運動となって展開された。しかし、これが実った時期は、日本統治時代末期の 1935 年であった。この 1935 年に地方選挙制度が施行されるようになり、台湾においても地方選挙が行われ地方議会が開かれることとなった。

⑥ 中華民国統治時代（1945 年～現在）

1945 年には、第二次世界大戦の終了とともに、異民族による植民地統治が終わりました。

20 世紀後半には、歴史の交錯の中、台湾は経済の奇跡と政治の民主化の過程を経て、世界から注目されるようになりました。台湾の歴史の発展は、台湾自身の発展の脈絡から見ても、世界の歴史の脈絡から見ても、非常に特殊であり、世界各国の歴史学者の関心を集めています。

①～⑥の 17～20 世紀の 400 年間の近代～現代にて台湾の風土に育った心音の音楽は桑原志音氏が楽曲の考察でも述べていたように、19 世紀にやや無調・無拍子の形式もみられたが、大きな流れでは、4 分の 4 拍子が確立された時代である。

現地の中国音楽大学と士林社区大学のオーケストラからも、田藤音楽を聴きながら、大地の自然や生植物に心を寄せるテーマが多い民族の心音を感じた。さらに歴史王朝物語りや太極拳のイメージも表現に感じることができる。オーケストラセットでは打楽器～管楽器～弦楽器の中では笛と弦に使用する材料が現地の生産である点は、全世界の民族（民俗）文化と同様である。日本との交流が深いゆえに、日本の代表的な音楽家が台

湾・中国の若者たちに親しまれているのも、近代から現代の一般民衆の心音の感受性のようである。中国交流との音楽会では、程大兆 作曲の陝北四章・第二楽章の演奏があり、民族楽器の紹介とともに感銘を受けた。これは6年前に北京を訪問した時にも同じ共感と特色（桑原志音氏の楽曲考察に同じ）を理解したのは偶然ではないと考える。

中国の人々に親しまれている日本の代表的な民族音楽作曲家として、私は近現代では宮城道雄と滝廉太郎を挙げたい。

宮城道雄「春の海」は8分の6拍子が自然の海や光や鳥を表現し、斬新な西洋音楽形式が過去の日本音楽に変革をもたらした事を、日本海の異国の地域でも甘受されている現実と結び、アジア音楽の大らかな民族性と理解したい。

同じ 19 世紀の音楽家：滝廉太郎の「荒城の月」

♪春高樓の花の宴
めぐる盃かげさして
千代の松が枝わけいでし
むかしの光いまいづこ♪

♪天上影はかわらねど
栄枯は移る世の姿
写さんとてか今もなお
ああ荒城のよはの月♪

土井晩翠の作詞は故郷：東北の青葉城から、青年時代の福島県会津若松の鶴が城の百虎隊の哀しい歴史から古城をイメージしたと伝えられるが、もの静かな情操の陰旋律の形式であるのに、メロディの美しさが永遠の名曲となって異国の地でも愛される曲となる共通的特色は、アジアの民族であるが、西洋の文化に造詣が深く、バッハ、ベートーベン、モーツァルト、シューベルトの作曲を学んでいるからであろう。宇宙の星の一つにすぎない地球の離れた地域でも、生きる人間は時代や文化環境が異なるとしても、image→make→produce する心音に共通する魂を感じて、民族歴史の足跡を進めるであろう。

2. アイヌ先住民

「そもそも蝦夷ヶ千島といっぱ、艮（うしとら）（東北）に当って一千余里を隔て、此の国に生ずる者自然に通力（つうりき）自在を得て、振分髪逆（ふりわけがみさかし）まに生ひ、眼の光あかねさす、朝日に向ふ如くなり。」 「・・・怒れる声は、百獣の身の毛を縮めたり。・・・放埒無法の異国なり。」

1685 年浄瑠璃：近松門左衛門の「賢女の手習並新暦」にある蝦夷ヶ千島の 1 節表現にある。

天下統一をねらった豊臣時代の末期の日本海沿岸は、江戸と奥羽地方を結ぶと同じく、蝦夷ヶ島と本州を結ぶ拠点が松前であった。江戸時代末期には蝦夷地は幕府の直轄地となり、開拓が進み、明治に「北海道」と改名された。しかし森林の原生林地帯の住民は漁猟が生業であり、本州とはかなり遅れた文化民俗地域となって、今日に至っている。歴史上では、古事記や日本書紀では日本の原住民・先住民として、蝦夷とアイヌの戦いも描かれている。日本人の民族ルーツを考察するのに、琉球人とアイヌ人を和人文化のルーツと考えると、逆さ地図の連結点を理解しやすい。

日本海地域の民族音楽の音階を考察すると、モンゴルの音階や音曲には、喜び哀しみを草原の大地の心音の表現と理解し、大陸の陸続きの風土で、中近東の文化影響と交流し発生育成された明るさとリズム性がある。対して、アイヌ民族（日本の先住民と理解し）は暗く激しきリズム性が不足している。アイヌ演舞は民話や生活をテーマに創作されているが、単調で寂しい印象であり、楽器の種類も少なく、ムックリやトンクリが知られていて、竹を材料にした楽器で、糸をはじき、口で風を鳴らす古風な楽器である。民芸品としても安価に取得できる。民族衣装には南国や中近東の宗教的な「気の流れ」を表現した文様が一般的であり、華やかな色彩はあまり見られない。美しい阿寒湖の自然と静けさだけが、訪れる旅人たちに、先人の魅力を最高に五感で感じ、語りあえる名景勝地として、未来の日本の音楽歴史に、素朴なアイヌの歴史を伝承すべき価値を問いかけて来る。現在は東京にもアイヌ音楽喫茶やアイヌ語勉強会の活動が継続されている。

[参考文献]

梅原 猛、上原和郎『アイヌは原日本人か』1982 小学館

高倉信一郎 関 秀志『北海道の風土と歴史』1977 株式会社 山川出版社

白浜睦夫 『地歴高等地図-現代世界とその歴史的背景-』1997 株式会社 帝国書院